

余部・千本松

姫路市余部区

今昔を問わず川のほとりに住む人々にとつて何時襲ってくるかわからない。天災を決して忘れてはならない。

ここでいう天災とは洪水による河川の氾濫である。家財から田畑までときには尊い人命までも奪い去るのが水害であって、人間はこの水害より自分の生命財産を護るため、古代より人と河との闘いは果てしなく延々と今日まで続き繰返されている。そして人と河との

闘いは永遠に続くのである。

今日、河川に見る水制、根固、築堤、護岸、樋門、背割堤、霞堤、越流堤等々、是みな人と河との闘いのあとである。

かつて揖保川の河口に近い上余部村（姫路市余部区）下河原より同西河原一帯にかけては毎年のように洪水の被害を被り、そのたびに農民達は堤防の復旧に狩り出された。そして、弁当、工具は自分持ち、しかも出潰れ（無給）とあってはその日の生活にも困る者が多勢あり、男手を失った田畑は荒れ放題であった。これがために村内では笑声ひとつ聞くことがなかったという。

この有様を見かねた同村の庄屋岩村源兵衛

むらゆき まるがめはん 網干代官所 (網干区興浜) に
この窮状を再三訴え出たがこれに対する藩か
らの回答はひとつとして得られなかったの
ある。

水害は毎年のようにやってくる。このまま
では村人の多くが深夜を待ち一家を挙げて村
を逃げ出す事はあきらかである。又、よしん
ば村に踏み止まるにしても年貢米の上納はも
ちろんのことその日の生活のため、可愛い我
が子を年季奉子に出し、年頃の娘という娘は
苦界に品物か何かのように売られてしまふ。
そこでこの水害を何としても防ぎとめ村人と
田畑を救うのが今こそ庄屋たる自分に与えら
れた責務であると秘そかに決意してこれを家

族に打開けたのである。先ず

一、水害を防ぐ手段として堤防に松の木を植
えることである。松を植えて二、三年はその
成果を期待出来ないが四、五年もすると松の
根はがっちりとして堤防を固め洪水による堤防の
洗掘を防ぐようになる。

一、成育した松は洪水による流木、雑草など
の堤内への侵入を防ぐ。

一、植えた松は並木となって、越流する水を
分散させる役目をしてその水勢を弱めること
により田畑の流失はおろか農作物に対する
被害を少なくする。

以上三つの利点を挙げた。そしてこれを実
行に移すに必要なものは一間程に伸びた若松

が千本とこの松を植える手間代それに植えた松が堤防に根を張るまでの維持に要する費用であるが、それについては我が家の財産を投じ、村人と田畑を救う計画であると説明したのである。

源兵工の言葉を一言もろさず聞いていた家族の者は誰れひとりとして反対する者もなくそれどころか村人と田畑あつての庄屋であり。万
一、この事業が失敗しても、第二、第三の源兵工が現れるであろうと、いった。そして水害から村人と田畑を守ることは子孫の為である、家族の者が生活を切りつめ、三度の食事を二度とし、たとえ一度にしてもその費用を念出するからこの事業を成しとげよ

う。という家族の悲壮な覚悟と力強い励ましによって源兵工が余部の堤防に松の若木九百八十本を植えたのは元禄年中のことであつた。

これを見た村人は堤防に松を植えてあの水害が防げるものかとあざ笑いしていたが、三年、五年を過ぎると松は源兵工の期待通りの成果を挙げ始めた。田畑の流失はおろか、作物の流出さえなくなったのである。

あれから十年、今では水害も忘れられようとしている。田畑は毎年決まった収穫をあげるようになる。松並木の維持管理を源兵工に願ひ出る村人が多勢あつた。

しかし、村を救つたこの松並木を源兵工は

丸亀藩に上納してその維持管理を任せただのである。

この余部の堤防の松並木は明治中期まで揖保川の清流に、その美しい姿をうつつし、余部の千本松としてその名を広め、遠近よりその景観を見んものと訪れる人が多かったと今日まで伝えられている。

